

研究者から見た蚕糸業の新たな展開

蚕糸・昆虫農業技術研究所 所長 村上 毅

1. はじめに

現在、我が国の蚕糸業は、かつて経験したことのない困難に直面しており、危機的な状況にある。このような状況の下で新たな展望を見出すことは容易ではないが、産業規模がここまで縮小し、これに伴って、各種の規制から解放されたことは新たな可能性への挑戦を容易にする側面を持つこともまた事実であろう。

研究者の立場からは、世界の最高水準にある我が国の蚕糸技術を維持し、引き続き発展させることは人類に対する貢献でもあると考えられるが、技術の水準は必ずしも研究の水準と一致するものではない。技術の水準を支えるのは産業であり、研究の進展である。同時に、研究の水準とその進展は技術と産業によって支えられており、産業と技術と研究は不可分な相互関係を持っている、と考えている。

以上の立場から我が国蚕糸業の現状とその背景を分析しつつ、今後の展望と新たな展開の可能性を考えてみたい。

2. 直面する困難の背景と原因

我が国蚕糸業が直面する困難の原因として、①世界一高い賃金水準、②急激な円高の進行、③海外からの安価な生糸・絹製品の流入、④労働力不足、⑤従事者の高齢化や後継者難、⑥労働力多投型の養蚕技術と機械化の立ち遅れ、⑦価格の低迷と採算性の低下、等々がしばしば指摘されてきたところであり、異論を挟むものではないが、これらの要因が相互に原因となり結果となって蚕糸業に影響を与えているのであって、いろいろの要因を並べたててみても問題の解決にはならないであろう。そうだとすれば、何がより根源的であるかを明らかにすることが必要であろう。

すなわち、世界一高い賃金水準を背景として、高い労賃コストを支払えば当然のことながら、生産物価格も高くならざるを得ないであろう。その上、急激な円高が進めば、海外から安価な生産物が流入してくるのは必然である。この問題を解決する方法としては“労働賃金を下げる”“労働生産性を賃金に見合った水準に引き上げる”“関税障壁を高め国境措置によって海外からの流入を防ぐ”“円の交換レートを大幅に引き下げる”“高くても売れる物を作る”などが理論的には考えられるが、現実問題としては「労

働生産性を高めるための技術開発」が重要である。しかし、これとても、他の多くの農産物とは違い、労働賃金で30倍以上もの較差がある国が競争相手であるとすれば、更に「差別化によって、海外では作れない物を作る」の二つを同時に進めるしかない。

また、労働力の不足、従事者の高齢化、後継者難などの問題も源をたせば価格の低迷と採算性の低下によるものである。したがって、この問題を解決するためには、収益性を向上させることが必要であり、技術革新による労働生産性を飛躍的に向上させるとともに差別化・高品質化を通じて“我が国でなければ作れないもの、高価格でも売れるもの”を作るしかないであろう。

さらに、しばしば指摘されているように、実需者の要求が直に伝わり難く、コスト高にもつながる複雑な流通経路の問題も大きな課題である。特に糸作りの段階では、最終的な製品や商品を意識した素材を開発し、実需者と直接結びつくことが重要であろう。この点は本日、お集まりの皆さんのところでもかなり進んできているように思われるが、原糸から織編加工、製品化まで最終商品で意識が統一された系列化が必要であるが、これを連結するコーディネート機能はまだまだ不十分だと考えられる。

3. どこに展望を見出すか

どのような産業でも、“技術革新を怠って生き残ることは出来ない”と云われている。我が国の蚕糸業も歴史的にみれば、養蚕技術においても、製糸技術の面でも、技術革新を続けながら発展してきた。

しかし、残念ながら、最近の10～20年の間には見るべき技術革新がなかったのではあるまいか。この間にも、技術開発がなかった訳ではない。問題は開発技術が技術革新に結び付かなかったということであり、この点では、我々研究サイドでも反省しなければならない。同時に、産業界でも、生糸在庫の累積と一掃、生糸価格の高騰と下落、和装需要の減退傾向と洋装用途での需要拡大、安価な洋装用品の流入など激動と変化の時代の中で、ややもすれば安全な旧守的傾向に流され、変化に対応する姿勢に欠けていたのではあるまいか。

ただ、この中でも、技術開発に必要な経験と研究の蓄積はなお、豊富であり、大きな可能性を持っていることは実証されたと考えている。

ここで私が云いたいのは、徒らに研究陣の能力を誇るのではなく、蚕糸業とその関連産業および周辺産業から養蚕農家までを含めた技術水準の高さ、その総合力のことである。その背景にある我が国の教育水準や高度に発展した産業技術とそれを支える器用さまでを含めた総合力において、なお十分な技術革新の可能性を持っているということ

であり、その上で、問題はこれを活用する意志と能力と知恵が動員されるかどうかという点にあるということである。

第二に、我が国のように成熟した消費社会においては、画一的な大量生産、大量消費から脱却し、高級化、差別化、個性化の流れが強まっている。そのため、衣料分野でも少量、多品目生産が重要になっており、不特定多数を対象とした素材生産から用途を明確に意識した物作りが進められている。絹のようにもともと、量的に少ない素材は、むしろこのような潮流に適しているものと考えられる。この点は、蚕糸業法、製糸業法の廃止という今日の状況の中で、一層重要になってくるのではないかと考えられる。

すなわち、従来の規制がなくなることに伴って、誰でも自由に繭や生糸が買えるようになれば、異分野からの参入が容易になり、ただでさえ少ない繭が、生糸以外の用途に流れ、あるいは、従来の製糸業とは異なる方法で絹素材の生産が行われる可能性も否定できない。

第三に、我が国の蚕糸業は長い伝統を持ち、我が国の文化に深く根差している。中国の生糸を加工したイタリアやフランス製のスカーフが3万円とか5万円で売れるのに、日本製のスカーフなら、2～3万円にしかならないとすれば、その差はどこから来るのであろうか？、“確立されたブランドだから”とか“有名デザイナーの作品だから”というのは確かに一つの理由かもしれないが、もう一步掘り下げて考えれば、結局のところ、「彼等の文化に根差している」ということではあるまいか。そうだとすれば、日本の文化は彼等の文化より劣っているというのか？、私は文化に優劣はないと考えるし、その固有の文化を大事にしながら、その良さを異文化圏の人々にも理解させるようにすることが重要なのだと考えている。

第四に、減少したとは云え、礼装用として一定量の和服需要があることも重要である。かつて、我が国の蚕糸業は各地に独特の個性的な多様な絹織物や絹製品を作り上げてきた。さらには、品質の良い生糸を海外に輸出しながら、くず繭までを利用して、特有の絹製品を生み出し、地域の振興に役立ててきた。

小さくなり続けるパイを奪い合いながら生き残るのも一つの道なら、新たなパイを求め、育てることも重要な選択肢の一つではないだろうか。

我が国の蚕糸業に今後の展望を求めるとすれば、以上に述べたような点に依拠する以外にないであろう。

4. 新たな展開の方向

減少したとは云うものの、安定した需要が期待できる高級和服用の生糸作りは今後も

重要な目標の一つである。しかし、最近のリヨンでの現物価格を見ても、中国糸とブラジル糸の価格差は1,000円/kg程度であり、品質較差、供給安定性較差を積み重ねても国産生糸が、ブラジル糸に比べ4～5,000円/kgもの較差を期待することは不可能である。そうだとすればユーザーと直結し、ユーザーの希望に的確に対応することまでを含め、用途に応じた高品質生糸を追求しなければならないであろう。

第二に、日本人の生活様式は洋風化しており、洋装分野での絹消費は拡大傾向にあるが、この分野では価格の問題と同時に衣料としての機能性や使用後の手入れなどにも不安があり、改善の余地が大きい。

“人体にやさしい絹”は現状で見る限り、イメージが先行し、その実態は必ずしも解明されていない。形態安定性や耐洗濯性などの問題もあり、これらを解明し、克服することは新たな展望を開く上で重要な課題である。

第三には、我が国固有の文化的伝統に根差した紋様やデザインを洋風化した国民の感性に重ね合わせることを通じて、異文化圏の人々にもこれを受け入れさせるように工夫していくことも重要である。

第四に、かつて我が国は各地に、その気候・風土の持つ特性を生かした独特の絹織物を持っていた。現在の繭生産量から考えれば、画一的な全国共通的な物作りを目指すよりも、むしろ、地域の特性を追求し、原料からの差別化までを含め、地域に根差した産業としての展開を考える必要があるだろう。

以上のような方向で今後の展望を拓こうとする場合、最も重要なことは、素材としての糸作りから、織・編物作り、製品化までの連携であり、そのコーディネート機能である。蚕糸業界にとって、最も欠けており、強化が必要なのはこの点ではないかと考えている。

私共の研究所は以上のような視点から、特に、洋装分野に適する絹新素材の開発を重点の一つとし、そのための蚕品種育成から糸作りまでの研究を進めている。また、絹蛋白質を理・化学的に修飾・改変し、コーティング材や創傷被覆材、抗血液凝固剤、靱帯用素材等非衣料分野への用途開拓に関連する研究も進展している。これらの研究は絹の高付加価値化を目指すものであるが、別の視点からみれば、工業原料としては、生糸品質が問題ではなく絹素材としての量と価格が重要である。したがって、安価で品質が劣り、あるいは品質が不安定な絹素材は非衣料用に消費するのが合理的である。総生産量が限られている以上、低品位の絹素材を非衣料用に大量消費すれば、結果として、品質の優れた生糸・絹素材の衣料素材として地位を守ることにつながるものでもあると考えることもできる。この点を特に付け加え、蛇足とします。